

松本清張研究会・
第45回研究発表会

松本清張「砂の器」国際シンポジウム

令和5年6月24日(土) 午後2時～6時

松本清張記念館 地階 企画展示室
対面・オンライン併用(参加者:100名)

研究発表

「メディアミックスによる清張文学の
大衆化—中国における「砂の器」の受容—」

中国・清華大学教授 王成

中国の改革開放期と日本の高度成長期とは、30年間のタイムラグがあります。高度成長期の1960年代の日本で起こった清張ブームが、1978年改革開放後の中国においても起きました。中国では、映画「砂の器」のヒットによってブームとなり、連環画、翻訳小説、ドラマといったメディアミックスによる清張文学の大衆化が生じています。

映画「砂の器」の中国語吹き替えバージョンは1980年に中国で公開され、大ヒットしました。それは、ある世代の中国人の共通記憶となっています。



器」は中国社会に浸透したのです。

当時、映画の翻訳者は映画「砂の器」のテーマを、「和賀英良への同情」「資本主義社会による青年の悲劇」と読み

とっていました。そして、脚本家の橋本忍と山田洋次の和賀英良に対する同情を、忠実に翻訳する努力をしていました。それが、この映画の流布に大きな役割を果たしたと思います。

映画の公開中、「砂の器」の中国語シナリオ「日本電影劇本」が作品テキストとして流通し読まれていたことが、今回の研究で分かりました。その「出版説明」は日本映画の当時の観方に大きな影響を与えています。

次に、連環画というメディアをご紹介します。連環画とは一種の中国ふうの漫画の形です。連環画「砂の器」は映画の1シーンを印刷して、その下に中国語の解説文を付けています。当時、「砂の器」の連環画は二種類出版されています。一つは、天津人民美術出版社の「砂の器」で、1981年3月に出ています。27万6千冊出版されてすぐ売り切れました。もう一つは電影出版社によるもので、1981年4月です。こちらは78万冊出版しました。脚本は原作どおりで211場面です。それに対して、天津人民出版社の連環画は158カット(場面)、電影出版社バージョンは177カットで、編集者の意図で絵コンテのように編集されました。

これらの連環画は、同じ画面でも、実は「解説」が違うことが分かりました。例えば、ラストシーンです。映画では最後に、字幕という形でハンセン病差別についての一種の訴えが出ます。それに対して、連環画では、電影出版社版はタイトル「砂の器」についての理解を表現しています。子供が海沿いで砂の器を作っているシーンで、和賀英良の一生も一時的に器になったとしても、砂の器のように風に吹かれ雨に打たれれば壊れてしまうのだ、と中国語で解説されています。天津人民美術出版社バージョンは最後にハンセン病の親子が流浪しているシーンの下に、「宿命」に支配された和賀英良やその「宿命」を生み出した環境を治療しなければならぬ」との解説があります。

映画「砂の器」のヒットの余波として、中国全土に清張ミステリーの出版ラッシュが起きました。大量出版は翻訳の通

俗化をもたらしました。代表的な「砂の器」の訳本は、1985年の曹修林による翻訳の「砂の器」と、孫明德たちの翻訳と、もう一つは2000年代の趙徳遠の翻訳です。比較して見ると、1980年代は原作に忠実な翻訳の仕方をしていてのに対して、最近になると翻訳も、社会派推理小説の巨匠というイメージにそって、大衆読者むけに「帰化」的な翻訳が流布しています。

原作の「砂の器」には、「宿命」というキーワードは見られないが、中国語訳では「宿命」が宣伝文句となっています。映画や連環画などのメディアの力で小説の翻訳までが変えられ、中国における「砂の器」のテーマは「宿命」という言葉に収斂されているのです。